

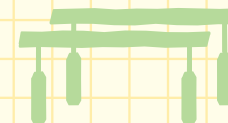
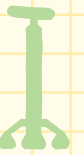


博愛記念病院
月刊広報誌



患者がベッドに いない病院.

「入院生活は、
ベッドで安静に過ごすもの」
という印象を覆し、
1日8時間の離床を常識に。
患者さんが楽しいと感じ、
自然と離床につながる環境づくりに
力を入れ、廃用症候群予防に
取り組んでいます。





廃用症候群予防を 徹底します



BAD



GOOD



廃

用症候群予防は、日本ではあまり注目されていませんが、私たちは病院で必ず取り組むべきこととして考え続けてきました。廃用症候群予防のカギとなるのは、できるだけ早い段階からベッドを離れる「離床」です。当院では8～10時間程度の離床を実践しており、できる限り長時間の離床を促して廃用症候群を防ぐことが、私たちの常識になっています。

一方、医療界には「入院したら安静が基本」という昔の常識がいまだに残っています。しかし実は、安静が必要な病態というのは少なく、多くの病態では安静を避け、離床すべきとされています。特に高齢者の場合は廃用症候群の進行が早く、安静を続けると寝たきり状態

に陥ることも少なくありません。

在宅復帰を目指す病院で、廃用症候群予防を行わずにリハビリテーションをするのは本末転倒です。廃用症候群による心身機能の低下を防ぎながら、機能向上のためのリハビリテーションを行うという、よく考えれば当たり前と思えることをしっかりと行う必要があります。

単に離床時間を長くするだけでは、患者さんが時間を持て余してしまうかもしれません。そのため、各病棟に配置された離床コーディネーターを中心に「ただ起きているだけではない」目的のある離床を促し、離床時間が楽しく、意義深いものになるよう努力する。ここにも当院の姿勢が表れています。

離床のきっかけづくり

scene1



心をほぐし、意欲へつなぐ本格カフェ

「コーヒーとともにゆっくりと心地よい空間で過ごしたい」という想いに寄り添い、水分・食事制限を多職種協業で乗り越え実現。コーヒー豆を挽き、香りや味、会話を楽しむことで手指訓練とQOL向上を兼ねています。

scene2



香りとぬくもりの“湯”から広がる笑顔

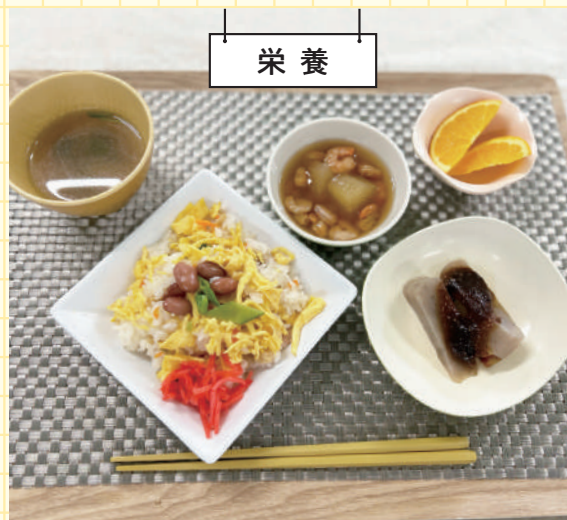
患者さんのお好みに合わせたアロマを用いた手浴・足浴。手足を清潔に保つことをはじめ、マッサージ、温浴、香りなどの快刺激を楽しむ様子に、さらに患者さんが集まります。手に拘縮のある方にもやわらぎの時間に。

看護



近隣の若手看護師が集った
倫理についての意見交換会。

栄養



週に一度の郷土料理の日、
今回は阿波のばら寿司！

HAKUAI PHOTO SNAP

リハビリ



学会等発表に向けて症例検討や勉強会に邁進。

デイケア



敬老会では傾城阿波の鳴門(人形浄瑠璃)などを鑑賞。

はくあい働くひと

回復期リハビリテーション病棟
主任 作業療法士
瀬河 亮介
Segawa Ryosuke

患者さんの
「したい」を叶える！



あなたの仕事内容を教えてください

仕事や生活動作の再獲得に向けたリハビリ、福祉用具選定、心理的ケアで患者さんの「したい」を叶えることです。

この仕事のやりがいは何ですか

患者さんが大切にしている作業を再びできた瞬間、表情がパッと明るくなりその人らしさが垣間見える時です。

今後の目標を教えてください

入院中も楽しみを感じられるよう集団リハビリや余暇活動の充実を図ること。職員の働きがいと成長も支援したい。